

函館で啄木に触れる

藤原 道夫

啄木の作品には心に触れる歌がいくつかある。故郷の山を懐かしんで詠んだ歌は一例。

ふるさとの山に向かひて 言ふことなし ふるさとの山はありがたきかな

私の故郷（父の実家があった）の親戚で唯一交流のあった「またいところ」に当たる方は、この歌が大好きで事あるごとに書いて寄こした。時にはるかに望む飯豊連峰の写真を添えて。私も同感だ、故郷から遠く望む真っ白な大日岳（飯豊連峰の最高峰、2,128m）は、時に神々しいまでに美しい姿を現した。加えて、

やはらかに柳あをめる 北上の岸辺目に見ゆ 泣けとごとくに

も好きな歌だ。滔々と流れる阿賀野川の風景がこの歌に重なって思い出される。

昨年7月初旬に函館に出かけた。函館というと啄木が一時期滞在し、曲がつけられてよく知られている歌

砂山の砂に腹這ひ 初恋の いたみを遠くおもひ出づる日

が詠まれた所だ。私は何故か次の歌が昔から気になっていた。

函館の青柳町こそかなしけれ 友の恋歌 矢ぐるまの花

啄木の函館における活動を知りたいと思い、駅の案内所で啄木に関する資料館のようなものがあるかどうか尋ねたところ、末広町に函館市文学館があり、ちょうど今自筆の日記や小説の原稿などが公開されているという答えが返ってきた。

翌日青函連絡船摩周丸を見学した後に、駅前から市電に乗って市文学館を訪ねた。レトロな車両が来た。ノン・ステップのバスに乗りなれた者には2段のステップがきつい。フワツとした椅子に腰かけると、停車ボタンに手が届かない。ともかく末広町に間もなく着き、近くにある市文学館もすぐに見つかった。由緒ありげな一部レンガ造りの建物だ。入館する時に「啄木に関心があって訪ねた」旨話すと、すぐに学芸員と思しき女性が現われ、2階の「石川啄木特別展」の会場に直行し、展示品や啄木の函館での活動と歌、さらには日誌がこの文学館に残された経緯などについて詳しく説明頂いた。要点は以下のよう。

まずは啄木が函館に来た経緯。21歳（1907）の5月、岩手県渋民村から単身で函館にやってきた。函館は当時貿易港として栄えていて、文化の水準も高かった。文学上では同人雑誌を発行する「苜蓿社ぼくしゅくしゃ」が活動していた。啄木は彼らの仲間として迎えられ、

生涯にわたって援助を受けることになる宮崎大四郎（郁雨）らと知り合う。当地の小学校の教員の職に就いていくばくかの収入を得、青柳町の借家に一家を呼び寄せる。「母を背負ひて…三步あゆまず」の歌はこの頃の作。借家は同人たちのたまり場ともなっていたようだ。同人の一人が失恋した時の様子を詠んだのが先に挙げた「函館の青柳町…」の歌だと知った。

同じ年の8月大火に襲われ、借家も務めていた小学校も失われてしまう。この時から啄木の流浪生活が始まった。札幌—小樽—釧路を経て、22歳の4月に小説家を志して東京に出た。自信とは裏腹に書いても小説は評価されず、生活が困窮して職を転々とした。盛岡尋常小学校の先輩に当たる金田一京助から援助を受けた（無心ともいえる）話はよく知られている。24歳の時に『一握の砂』を出版し、歌人として知られるようになる。歌集は金田一京助・宮崎大四郎両氏に捧げられている。

展示されている小説の原稿（複製）や日誌（自筆）の一部を見る。字がきれいだ。日誌が当館に保管されている経緯もうかがった。死後捨てるようにと言われていた日誌を、妻節子が捨てきれずに函館に持参して来た。宮崎氏はこれを残すように努めた結果だった。

節子は間もなく結核が悪化し、函館で亡くなる。宮崎氏の尽力により、函館郊外に節子の墓が作られる。後に小石川に埋葬された啄木また両親の遺骨もここに移され、啄木一家の墓が整えられた。傍らに

東海の小島の磯の白砂に われ泣きぬれて 蟹とたはむる

と刻んだ歌碑が立っている。学芸員さんはこう話していた。日本という島国の中で前に行けず後ろに戻れず右往左往する啄木の心境が込められている。単なる感傷の歌ではない。

面白かったのは金田一家のこと。家人は啄木を嫌っていたが、彼の死後京助氏に啄木についての原稿や講演の依頼が舞い込み、貸した金額以上の収入が金田一家もたらされたとか。

一通り説明頂いた後に、学芸員さんが実感を込めて話していた。

新しき明日の来るを信ずといふ 自分の言葉に 嘘はなけれど一

若い時自分もそんな気持ちを持ったことがあった。人生の踏ん張りどころか。

函館を訪ねながら、函館山にも、修道院にも、五稜郭にも出かけなかった。できれば行きたいと思っていた立待岬も強風のため断念した。しかし思いがけずに文学館を訪ねる機会を持てた。そこで過ごしたひと時は、他に代えがたい思いがする。

学芸員さん、有難うございました！